

こだわり宅見

酒屋の風情を残す家

(中京区)

新しくなった瓦は日差しを受けて輝き、格子窓の下の黒ずんだ壁面の石は長い年月を経た風格が漂う。

京都市中京区のOさん(73)は三年前、築百二十年の自宅を大規模改築した。家は老舗の酒店。店頭での商売をやめ、得意先の高齢者宅など数軒への配達だけを続けるようになったため、店舗としての役割を優先した造りから、住み良さ重視の家に変えた。

母屋は平屋建ての大部分



土間を改装した玄関。木製看板を壁に据え付け、老舗酒店の趣を残している(京都市中京区)

築120年の老舗店舗 住み良さ重視へ改築

を店舗にあたる広い土間が二階建ての離れは木材が傷多く、「一から新築した方が占め、居住空間が狭かった。んで雨漏りするなど課題が安上がりだったかもしれない

い」。それでも建築当時から外壁に使っていた石を再利用したり、土間を石敷きにした玄関の内壁に木製看板を据え付けたりして「酒屋の風情と古き良き日本家屋の趣を失わず、昔と今がつながる」改築にこだわった。



瓦や木材を新調した一方、酒店の看板や窓の下の石壁を再利用して改築したOさん宅

台所の流し台を妻の背丈に合った高さにするなど住み心地は格段に良くなったが、愛着は変わらないう「新居」に満足して暮らしている。(高元昭典)